

26.『天塩日誌』 アイヌと允恭

蝦夷地の紀行文を読んでいて、允恭天皇のガイドネタに出くわしたことがあります。

「北海道命名 150 年」で全道が盛り上がっていた 2018 年夏、名寄市の北国博物館で『天塩日誌（現代語版）』を見つけました。初めは非売品ということで断られたのですが、古市古墳群のボランティアガイドをしていると自己紹介すると話が弾み、ご厚意で冊子を頂戴することができました。

天塩川は北北海道を南北に貫く大河で、『天塩日誌』は安政 4 年(1857)に流域の自然やアイヌの風俗を踏査した記録です。著者の松浦武四郎は「ほっかいどう」の名付け親として、NHK ドラマ『永遠のニシパ』の主人公にもなりました。

踏査の途中、武四郎は長年不思議に思っていた「カイナー」という言葉の意味をアイヌの長老に訊ねます。長老は、「アイノ(アイヌ)＝人」は和人と交わってからの言葉で、和人と交わっていない樺太や奥地の村々では自らのことを「カイ＝この国に生まれた者」＋「ナー＝尊称」といっている、と答えました。武四郎は、彼らは蝦夷地のことを「カイ」と呼んでいると理解し、蝦夷地を改称する際に、アイヌ民族に対する敬愛の念を込めて「北加伊道」を提言しました。



北海道命名の地



「北海道命名の地」から眺めた天塩川



腕輪(テクンカニ)
(札幌市アイヌ文化交流センター)

6 月 27 日「この地以北一帯に日本の古い習慣が、今も多く残っている」

腕輪(テクンカニ)を着ける風習をこのように紹介し、万葉集にある「釧つく…」という言葉がこれに当たるとしました。この理解が正しいかどうか分かりませんが、確かに本州の古い習慣が残っているようです。

○アイヌ鎧

6 月 18 日「鎧(アヨップ)と称するものが飾ってあったが、これは生漆を塗った皮の小さな片をやはり草で緘(おど)したもので…。考えてみると、これは『打ち掛け鎧』というものの類であろう…。後になって友人の一人もやはり日本古代の鎧の形と同じだろうと云っていた…」

アイヌ鎧でしょう。アイヌ鎧は新井白石が『蝦夷志』(1720)で初めて紹介し、その後もたびたび蝦夷地の紹介本に登場します。戦前、サハリンで発見された 2 領が現存しています。



復元品を展示している道立北海道博物館の学芸員に伺うと「伝世品ではないが、(鎧製作の)技術は伝承」というお話でした。

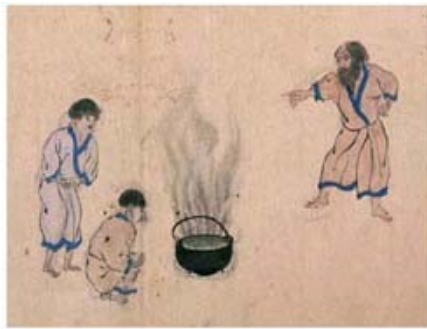
考古学者の末永雅雄はアイヌ鎧を研究し、『挂甲の系譜』を著します。同書は現存するアイヌ鎧を平安時代のものとし「この挂甲は日本古墳出土の胴丸式挂甲と全くその規を一にする」と記します。ただしその後の研究もあり、鎧製作の技術的な系譜や、現存するアイヌ鎧の作成年代については慎重な判断が必要のようです。

アイヌ鎧を見て思い浮かぶのが、近つ飛鳥博物館の展示です。長持山古墳から出土した挂甲の復元品を展示していますが、その横に掲示している「甲冑の変遷図」に描かれた胴丸式挂甲の図が、アイヌ鎧と瓜二つなのです。長持山古墳は允恭天皇陵古墳(墳丘長 230m の前方後円墳)の陪塚とされています。

挂甲は 5 世紀中頃に登場します。各地の大型古墳は短甲を複数領出土することがあっても、挂甲は原則として1領しか出土しないそうです。つまり、倭王権が各地の首長(王)に配布した最上級の武具でした。古市古墳群で挂甲を出土したのは、長持山古墳と大王クラスとされる峯ヶ塚古墳の 2 基だけです。長持山古墳は直径 40mの円墳で古市古墳群の中では決して大きくありません。その被葬者に挂甲を与えた允恭天皇はどれほどの力を持っていたのでしょうか。

○サイモン

6 月 21 日「七十才余りの老婆で、手が腐ったようになっているのを見る。これは若い頃にサイモンでこのようになったのだという。サイモンというのは、密通とかその他の悪事をしたかどうかを調べるのに、神に誓ってから熱湯の中に入れてある三個の小石を素手で探り取らせる方法で、悪いことをしていなければ火傷しないが、そうでないときは火傷で腐ったようになる、という一種の原始裁判である」



サイモン
『蝦夷島奇観』(東京国立博物館)

昭和 30 年代の沙流郡(日高町)アイヌへの聞き取り調査にも、サイモン・キレ(*1)が近昔まで行われていたという報告があります。サイモンは一部地域に限ったものではなく、アイヌ社会の風習だったのでしょう。

サイモンを聞いて連想するのが允恭天皇です。氏姓の乱れを正すため、甘樫丘で盟神探湯(くがたち)(*2)という神意裁判を行いました。『日本書紀』は允恭天皇のほかにも、応神天皇、継体天皇の条に盟神探湯が登場します。

『隋書(倭国伝)』は「つねに獄訟を訊究するに…或は小石を沸湯中に置き、競う所の者をして之を探らしめ云う、理の曲なる者は、即ち手爛(ただ)る」と具体的に紹介しています。小石を探り取らせるところはサイモンと同じです。古墳時代の遺風を記したのか、それとも隋の時代に入っても倭国で行われていたのでしょうか。

室町時代に「湯起請」(*3)という神意裁判が行われました。古代の盟神探湯から数百年も記録が途絶えているので、両者は連続しているのか或いは断絶したのか、両方の意見があるそうです。

ところで、なぜサイモンと云うのか。アイヌ学者の瀬川拓郎は、中世の日本において湯起請に先立って唱えた祈祷詞＝祭文に由来するとししました。鎌倉時代の説話集『古今著聞集』は、鳥羽法皇の御所内で御衣紛失の疑いをかけられた女房が「北野にこもりて祭文かきてまもられけるに…」(無実であることの誓約文を書いて北野天満宮で監視された…)と記しています。これを参籠起請といい、監視の期間中に「失」(身の回りの変調)が現われるかどうかで真偽を判断しました。鎌倉幕府は 9 ヶ条の「起請失」(*4)を定めて、紛争解決の最終手段に用いました。中世日本は神仏に対する誓約の言葉や文章を「さいもん」と云っていたようです。サイモンは本州と北海道の幅広い交流を示す一例と云えます。

(2022.2 古川)

*1 キレは「する、させる」の意味。

*2 資料 6 は盟神探湯の語源についてさまざまな説があるとする中で「くか」=穢、また「たち」=断=決定であり、罪を判断する意味とした。さらに、神に対して真実であることを誓う行為に「盟神」また、誓いが真実であることを証明する行為に「探湯」を当てているとした。

*3 起請:自分の行為、言説に偽りのないことを神仏に誓うこと。

*4 『吾妻鏡』文暦2年(1235)閏6月28日 「起請矢の篇目を定む」

①鼻血を出す事、②病気になる事(以前からの病気を除く)、③鳶・烏の糞が懸かる事、④鼠に衣装が喰われる事、⑤身体から血が出る事(楊枝を使ったとき、月水、痔を除く)、⑥家族・親類に不幸がある事、⑦父子が罪を犯す事、⑧飲食の時に咽ぶ事(背中を叩かれるほどの場合)、⑨乗っていた馬が斃れる事。

資料1 松浦武四郎『天塩日記』(現代語訳:丸山道子)2018年

資料2 末永雅雄『挂甲の系譜』1979年

資料3 若狭徹『埴輪は語る』2021年

資料4 藤井寺市教育委員会『新版 古市古墳群』1993年

資料5 早川昇『アイヌの民俗』1970年

資料6 利光三津夫『日本古代法制史』1986年

資料7 岩波文庫『日本書紀(二)、(三)』1994年

資料8 藤堂明保、他『倭国伝』2010年

資料9 清水克行『日本神判史』2010年

資料10 瀬川拓郎『アイヌ学入門』2015年

資料11 『古今著聞集』(日本古典文学大系 84)1966年

資料12 永原慶二監修『全譯 吾妻鏡 第4巻』1977年